

経営協議会における意見への対応について(第Ⅳ期令和5年)

開催日	委員からの意見	法人運営への活用(取組)
R5.3.29	(企業等における博士人材の活用と望まれる能力について) <u>データサイエンス人材が圧倒的に不足している。情報学部がキーになるのではないか。</u>	令和6年4月に設置する情報学研究科では、情報学部で修得したAI、<u>データサイエンスなどのスキル、知識をより先端的・実践的な場面で活用する能力を養い、行政・企業等における意思決定への関与や社会の問題解決を通じ、Society5.0社会の実現や、人間中心で持続可能な新たな社会の実現に資する高度情報専門人材を育成することとしている。</u>
	人材を確保したい企業はあるので、研究所や大学への就職だけでなく、企業への就職も視野に入れる必要がある。<u>ニーズと人材をつなぐところがない。ブリッジをかける人や制度、組織が必要なのではないか。</u> <u>どこに需要があり、どのように企業と大学を結び付けられるか、ここを見つけていく努力が必要。</u> <u>企業との共同研究や委託講座などの活動を行い、接点を深めるのも重要。</u>	ポストドクター及び博士後期課程の学生のキャリア開発を支援するシステムを構築し、産業界において活躍できる実践的な人材を育成することを目的とする<u>高度人材育成センターがあり、就業力養成セミナーやインターンシップの実施など企業との交流及び連携を行っている。</u> さらに、国内外の産業界等とのつながりを持つ人材育成や研究機能の高度化は、組織対組織の連携が不可欠であり、現在本学では4つの<u>共同研究講座を設置している。</u>本講座では毎年20名程度の学生が参画し、<u>企業等との接点</u>となっている。 また、令和5年12月には群馬経済同友会との<u>意見交換会を開催し、新大学院を中心に、本学の教育研究機能強化の現状を説明するとともに、リカレント・リスキング教育や県内産業の振興をテーマとした意見交換を行った。</u>今後も企業との対話の機会を増やし、お互いの理解度を高め、産業界からの評価や期待に応えていきたい。
	卒業生が技術者あるいは専門の研究者として企業に就職しており、ロールモデルがいる。本人たちが<u>一番企業のニーズや大学院で学んだこととのミスマッチやアンバランスを承知している。</u>その人の声を聴いてみるのも近道ではないか。	一部の授業(理工学府博士後期課程「リーダーシップ特論Ⅰ・Ⅱ」)では、<u>卒業生や社会人大学院生と意見交換・交流できる場を設定し、将来像を考えさせる機会を設けている。</u> また、<u>今後、修了生アンケート等により適宜カリキュラムを見直していく。</u>

R5.6.27	(生成AI (ChatGPT等) への対応について) デジタル技術が進むことによって、何ができて何ができないのか、何をやって良くて何がいけないのか、きちんと確認、議論をすることが大事。学術分野を超えて、どれだけの教員がこの問題と向き合い、教育研究指導の在り方を考えていくのか。 <u>大学としては、最低限の共通ルールを守るように明らかにし、学内で議論することが大事なのではないか。</u>	<u>共通ルールとして、各学部、研究科等と検討を行い、12月21日付けで「教育における生成AIの利活用に関するガイドライン」と題して、大学教育センター名で教員向けと学生向けの指針をそれぞれ定めた。</u> 内容については、生成AIを利用する時に気をつけること、生成AIの利活用が想定される例、授業における生成AIの利活用などである。 10月30日には、全学FD連続講演会の一環として、「生成AIへの対応～生成AI について理解を深め教育現場で利活用するために～」と題しオンラインで研修を行った。参加者は事前登録者で174名あり、また当日参加できなかった教員に対しては、オンデマンド型で後日聴講するように呼び掛けた。
R5.9.27	(食健康科学を基軸としたヘルスプロモーションの推進について) 健康は国民の関心事であり、食品メーカーは健康と美味しさで商品PRを行っているが、それを科学で裏付けることに資する。 <u>食品の研究や製造を行っている拠点が県内にたくさんある。もう少し骨格ができてからだと思うが、コンセプトを説明すると、興味を持つ企業も多いのではないか。</u>	県内では、食健康科学教育研究センターの設置時より群馬県食品工業協会との協力関係を<u>進めてきた</u>。食健康科学を基軸としたヘルスプロモーション構想、食健康科学研究科の設置構想については、<u>今後、当協会の会報に学長が寄稿することで食品関係企業への周知を予定している。</u> また、<u>食健康科学研究科の設置構想について企業へ説明するとともに、一部の企業から設置要望もいただいている。</u>食健康科学は本学の新しい地域貢献のかたちとして基幹となる構想であることから、<u>引き続き関係企業への説明に努めたい。</u>
	群馬県は、農業や酪農、食肉も盛んなため、群馬県ならではの食健康科学に関する学問領域が構築されるのではないかと期待している。 <u>群馬大学ならではのものとして、データサイエンスもキーワードになるのではないか。データサイエンスを学んだうえで、食健康科学を学ぶことができるということをアピールしていけば、管理栄養士や医学系、理工学系を含めて幅広い方が集まり、優秀な研究者が育つのではないかと期待している。</u> <u>また、食と健康ということで、美味しさの科学やスポーツ等も取り入れるなど、多面的に行うことも必要ではないか。</u>	<u>食健康科学教育研究センターでは、群馬県産食品の機能分析を行う群馬県のGアナライズチームにも参加し取組を進めてきた。</u> また、センターに就労女性コホートユニットを新設した際に、<u>数理データ科学教育研究センターから教員を再配置して、データサイエンス連携を強化したところであり、現在設置構想中の食健康科学研究科においても関係教員が参画する予定である。</u> <u>食健康科学研究科の科目ではスポーツ医学、美味しさ、味を感じるメカニズム等の学修を取り入れる予定である。</u> 今後もデータサイエンス教育研究を強化しながら、食健康科学を多面的な学術分野として発展できるよう活動の幅を広げていきたい。

	(今後の教養教育の在り方について) <u>学部の1、2年だけではなく、大学院まで含めて教養教育を打ち込んでいくという考え方で、学部と大学院の6年間の中でしっかりと勉強するという選択肢もあるのではないか。</u>	<u>大学院課程の学生が共通で身につけなければならないものとして、新たに来年度から「Research Skills-Presentation and Writing (効果的なプレゼンスキルとライティングスキル)」及び「レギュラトリーサイエンス概論」を大学院に開講する。</u> <u>また、学部高年次、学部と大学院の教養教育の橋渡し、大学院における教養教育の意義について確認していく。</u>
R5.12.27	教養教育でいろいろなことを教えるのは重要である。 <u>地域には様々な課題があり、群馬県には大きな産業集積がある。行政、学校関係者、医学、企業、金融など、1コマ客員教授として担当していただく</u>と学生の目つきが変わる、ハッと驚くような話をされると思う。例年は難しいとしても、次のタイミングに向けて計画していくとよいのではないか。	豊かな人間性を備え、広い視野と探求心を持ち、基礎知識に裏打ちされた深い専門性を有する人材を育成していくため、引き続き教養教育の充実を検討していく。 <u>また、「ぐんま未来学」や「学びのリテラシー(2)」などの授業でゲスト講師という形で外部講師を招いて実践しており、このような授業を増やしていくことを検討する。</u>自治体や県内外で活躍する様々な分野の識者を招いた講義を行い、学生達の地域での活躍を促し、可能性を開拓するような試みにつなげていきたい。